

| | |
|---------|--|
| 氏名（本籍） | 安 <small>あん</small> 齋 <small>ざい</small> 由 <small>ゆ</small> 貴 <small>き</small> 子 <small>こ</small> |
| 学位の種類 | 博士（医学） |
| 学位記番号 | 医 第 3352 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 17 年 3 月 2 日 |
| 学位授与の条件 | 学位規則第 4 条第 2 項該当 |
| 最終学歴 | 平成 2 年 3 月 26 日 千葉大学大学院看護学研究科 修士課程修了 |
| 学位論文題目 | 成人男性における飲酒習慣と医療利用に関するコ ホート研究 |

（主 査）

| | |
|--------|---------------------|
| 論文審査委員 | 教授 辻 一 郎 教授 舟 山 眞 人 |
| | 教授 永 富 良 一 |

論文内容要旨

成人男性の飲酒習慣と死亡率の関連において、1日1杯程度の飲酒者の死亡率が最も低く、JまたはU字曲線になることが明らかにされている。この結果から、飲酒習慣と医療機関の医療費においても、同様の関連を示すと仮定できるが、飲酒習慣と医療費についての研究は少なく、未だ結論は見いだされていない。そこで、本研究では、飲酒習慣が医療費に及ぼす影響について分析した。

データは大崎国保加入者コホート研究を用いた。大崎国保加入者コホート研究は、宮城県大崎保健所管内の1市11町（2004年現在）に住む40歳から79歳の国民健康保険加入者を対象としている。ベースライン調査は、1994年10月から12月に行った。調査項目は、社会人口学的情報、既往歴、身体機能、嗜好や食生活などの健康に関する生活習慣である。対象者54,996人に対し、有効回答者数52,029人（95%）を追跡した。追跡調査においては、宮城県国民健康保険団体連合会との契約により、1995年1月から継続して、入院・入院外の受診日数と医療費に関する情報を把握している。

本調査においては、飲酒習慣に関する無記入者や、肝疾患等飲酒に関連する疾患の既往歴のある者を除外して、男性19,383人を対象とした。4年間の死亡率、総医療費、入院日数、入院医療費、外来受診日数、外来医療費の分析を行った。飲酒習慣は、過去飲酒、非飲酒、現在1-149g/w飲酒、150-299g/w飲酒、300-449g/w飲酒、450g/w以上飲酒の6つに分類した。

その結果、死亡率は、1-149g/w飲酒者が最も低かった。総医療費については、150-299g/w飲酒者が最も低く、また、過去飲酒者の総医療費が、他のすべての群より有意に高かった。対象者の背景においても、過去飲酒者は、低い身体活動レベルの者や疾患の既往を持つ者が多く、健康レベルが低い人が多い集団であった。

過去飲酒者を除き、飲酒量と医療費の関連を分析した。その結果、入院日数および医療費はU字曲線を示した。入院医療費が最も低いのは150-299g/w飲酒者であったが、60歳未満の飲酒者では、死亡率と同様に、1-149g/w飲酒者が最も低く、J型の関係を示した。一方、外来では、受診日数、医療費共に、飲酒量の増加とともに低下した。これは、全ての年齢において同様であった。

以上のことから、飲酒量と入院医療費との関係はU字曲線、外来医療費との関連は逆の直線的な関係があることが明らかになった。

審査結果の要旨

成人男性の飲酒習慣と死亡率の関連において、1日1杯程度の飲酒者の死亡率が最も低く、J またはU字曲線になることが明らかにされている。この結果から、飲酒習慣と医療機関の医療費においても、同様の関連を示すと仮定できるが、飲酒習慣と医療費についての研究は少なく、未だ結論は見いだされていない。また、これらは、① 標本数が少ない、横断研究であるなどの研究デザイン上の問題、② 医療機関の利用について自己報告の思い出しによってデータを収集している、③ 飲酒習慣と社会経済的状態との関連が交絡因子となっている可能性がある等の研究の限界に起因すると考えられる。そこで、本研究では、大崎国保加入者コホート研究を用いて、飲酒習慣が医療費に及ぼす影響について分析したものである。

データは宮城県大崎保健所管内の1市11町（2004年現在）に住む40歳から79歳の国民健康保険加入者を対象としている。対象者54,996人に対し、有効回答者数52,029人（95%）を追跡した。本研究においては、飲酒習慣に関する無記入者や、肝疾患等飲酒に関連する疾患の既往歴のある者を除外して、男性19,383人を対象とし、4年間の死亡率、総医療費、入院日数、入院医療費、外来受診日数、外来医療費の分析を行った。飲酒習慣は、過去飲酒、非飲酒、現在1-149g/w飲酒、150-299g/w飲酒、300-449g/w飲酒、450g/w以上飲酒の6つに分類した。

その結果、飲酒量と入院日数および医療費との関連はU字曲線を示した。年齢別においては、60歳以上の年齢で、入院医療費が最も低いのは150-299g/w飲酒者であったが、60歳未満では、1-149g/w飲酒者が最も低く、死亡率と同様の結果を示した。一方、外来では、受診日数、医療費共に、飲酒量の増加とともに低下した。これは、全ての年齢において同様であった。以上の結果から、飲酒量と入院医療費との関係はU字曲線、外来医療費との関連は逆の直線的な関係があることが明らかになった。

本研究は、皆保険制度による医療保険制度のもと大規模なコホートを4年間追跡し、基本健康診査結果から飲酒量の自己報告の妥当性も確保され、交絡因子の補正も行っている。従来の研究方法論上の課題を解決し、上記の研究方法論上の長所を持つ本研究によって、飲酒量と入院および外来の医療費の関連が明らかになった。以上のことから、本研究は、公衆衛生学上の意義が大きく、すぐれた論文であると判断された。

よって、本論文は博士（医学）の学位論文として合格と認める。